

差別を生み出すもの② –身についた固定化されたイメージ–

～黒いランドセル～

ある学校に、一人の女子児童が入学してきました。入学後、この児童は教室の中でいじめを受けようになりました。理由は、黒いランドセルを背負って通学していたからでした。もちろん担任の先生は教室で対応をしましたが、いじめはおさまりません。とうとうその児童は転校することになったのでした。

この女子児童が黒いランドセルで通学していたことには理由がありました。女子児童には3歳年上のお兄さんがいました。しかし、小学校入学時にはすでに小児がんに冒されていたのです。このお兄さんは、1回しか自分の黒いランドセルを背負って登校することができませんでした。

女子児童の入学に際し、家族は新しいランドセルを買うことをすすめましたが、女子児童は「大好きだったお兄ちゃんと毎日一緒に学校に行きたいから」と、言うことを聞きませんでした。その強い希望に周囲も折れ見守ることにしたのですが、この女子児童の願いは無残にもつぶされたのでした。

(毎日新聞2002年6月28日付夕刊より要約)

わたしたちの思い込みは、時として子どもに刷りこまれ、このような悲しいできごとを引き起こすことがあります。なお、その後、女子児童は、転校先の学校で黒いランドセルを背負って通学することができたということです。

–ステレオタイプ–

わたしたちは、特定の集団や人に対して、単純化したイメージを持ちがちです。その内容は様々ですが、例えば、「都会の人は洗練されている」といった肯定的なものから、「都会の人は冷たい」といった否定的なものまであります。このような固定化されたイメージを**ステレオタイプ**といいます。ステレオタイプは誤りに気がついたり、多様な角度から事実を知ったりすることにより修正されていきます。しかしながら、修正されなかったステレオタイプは偏見へとつながることがあります。

「偏見とは、ある集団に所属している人が、単にその集団に所属しているからとか、それゆえにまた、その集団の持っている嫌な特質をもっていると思われるとかいう理由だけで、その人に対して向けられる嫌悪な態度、ないしは敵意ある態度である」(G.W.オルポート「偏見の心理」より)とされています。そして、このような偏見が現代社会における差別を温存している1つの要因だと指摘されているのです。

どこで身につくの

わたしたちのこのような決めつけた見方は、子どもの頃から、マスメディアや家庭での会話などをとおして、知らず知らずのうちにつくりあげられていくとされています。

テレビのホームドラマなどにおいては、女性が家事をし、男性はくつろいでいる姿などが多く見られます。テレビのコマーシャルなどにおいても、男性や女性の固定的な役割に基づいたものがたくさん見られます。こうした場面を子どものころから見ていると、どのような意識が育つのでしょうか。

様々な決めつけが、社会において行われることにより、「女性は～すべきだ」「高齢者は…すべきではない」などの決めつけた見方が支配的になり、個人の自由な生き方ができなくなることが問題なのです。



大分市人権フォトコンテストの作品